

ノファ語 (ᑎᑦᑭᑦᑲᑦ) の認知言語学的考察

項目	主観的把握	客観的把握	乃語
動詞の捉え方	「なる」 的言語	「する」 的言語	客観
認知主体のあり方	感受者	動作主	客観
状況の捉え方	「コト」・「トコロ」 的言語	「モノ」 的言語	客観 > 客観
存在か所有か	BE 言語	HAVE 言語	主観
動詞の焦点	行為中心	結果中心	客観
終わり指向性	なし	あり	客観
名詞の捉え方	無界性	有界性	主観 > 客観
名詞のスキーマー	連続体スキーマー	個体スキーマー	主観
一人称代名詞	多様	一定	客観
敬語	発達・文法範疇	敬意表現	客観
代名詞の省略	多い	まれ	客観
非人称主語	なし	あり	主観
題目か主語か	題目優先	主語優先	客観
連体修飾構造	語用論的	文法的	主観
「ここ」 の捉え方	場所中心	人中心	主観
主客合体性	あり	なし	客観
モダリティ表現	エピステミック	デオンティック	特殊
与格か間接目的語か	与格	間接目的語	客観
間接受身	あり	なし	客観
中間構文	直接経験表現	特性記述表現	客観
動詞枠付けか衛生枠付けか	動詞枠付け	衛生枠付け	主観
主観述語	あり	なし	客観
擬音語・擬態語	多い	少ない	客観
過去時物語中の現在時制	多い	まれ	客観
直接話法か間接話法か	ほぼ直接話法	間接話法も発達	主観

動詞の捉え方

・生物・非生物関係無く、動作主が明確である場合は他動詞の方が自然。

例 wate forete wirtor (風が窓を割った) > wirtor sasete forete kam wate (窓が風により割れた)

・そもそも、ノファ語には「自動詞」が存在しない。動詞は全て他動詞であり、自動詞形・自動詞表現とされているものは「繫辞 sas (他動詞) + (他) 動詞過去/完了形」あるいは「(他) 動詞 + 再帰代名詞」であり、他動詞を用いて表したに過ぎない。そのため、ノファ語ではどのような文であっても「動作主」が暗示されていることになる。

例 wirtor sasete forete (窓が割れた)

訳文こそ「窓が割れた」だが、繫辞 sas は「対格の状態を取る」、動詞 for は「(対格を) 割る・折る」という他動詞である。つまり、ノファ語的に wirtor sasete forete という文を解釈すると「窓は『(何らかの存在が) (何らかを) 折った・割った』という状態をとった」となり、そこには「窓を割った存在」が暗示されている。よって、訳文としては「窓が割れた」よりも「何かが窓を割った」の方がふさわしい。

認知主体のあり方

- ・客観的把握をする。
- ・低アニメシーな存在、原因・理由等も主格と成り得る。

状況の捉え方

- ・ノファ語は原則的に「モノ」的言語である。

例 Ane mirem Er ke? (あなたは私を愛していますか?)

Ane mirem Erni tonb ke? (あなたは私の概念を愛していますか?)

の二文であれば、上文の方が明らかに自然な形である。

- ・しかし、動名詞 (英語における不定詞も兼用) の語尾-ko はアルヘニク語でまさしく「概念・事象」を意味する語、“Eko”を借用したものである。

例 Er malete kaU se kami nokrko (私は彼に「彼女を殺すこと」を命じた)

存在か所有か

- ・ノファ語は BE 言語である。もともと、繫辞 sas では無く、動詞 mer や mec という「(対格に) 存在する」という動詞を用いるが。

例 Er kof wise (私は妹を持つ、有する)

wise mec ne Er (妹が私に対して存在する)

上文の kof という動詞は「物理的に手で持つ」、「属性として有する」、そして「所有権を有する」場合に用いる語であり、「私には妹がいる」という意味であるのならば下文が正しい。

動詞の焦点/終わり指向性

- ・ノファ語の動詞は行為の完遂を含意する。

例 Er mwer kaU (私は彼を説得する)

上記の文の様に、相詞 (動詞の進行具合、完結度を表す詞) が無いノファ語の動詞は「完結予定相」という相であり、「いずれその動作が完結する・完遂される」ことを暗示している。なので、

例 Er mwerete kaU, take na sas Utemete (私は彼を説得したが、彼は出なかった)

という文は誤りである。動詞の完遂含意性を否定するには、未然相詞 nane を用いる必要がある。nane は「動詞が未だに遂行されていないこと」の他、「動作が完遂されないこと」をも表す。つまり、上記の例文を正しく書くならば、

例 Er nane mwerete kaU, take na sas Utemete (私は彼を説得しようとしたが、彼は出なかった)

となる。なお、mal (命令する、指示する) は「指示を伝えた時点」で完遂される。なので、

例 Er malete kaU se kami nokrko, take kaU na kwete Ine. (私は彼に彼女を殺すよう命じたが、彼は実行しなかった)

という文は正しい。

名詞の捉え方/名詞のスキーマー

- ・名詞に単複、可算不可算は無い。

例 Iko mecem Ena wom (水の中に魚がいる)

この文では、魚の数はわからない。

- ・しかし、ゼロの表現を持つ代名詞 (nan 代名詞) が存在する

一人称代名詞

- ・そもそも学術用語 (教授用語) であるため、代名詞は一つしか無い。

敬語

- ・上記と同じ理由から。敬称の-maE や接頭辞 ma-が存在するが、それ自体も正式なものではない

代名詞の省略

- ・会話中、相手に質問をする時に省略される程度。

例 sas mokalinb ke? (大丈夫ですか?)

非人称主語

- ・存在しない。

例 se Ane qeqirxa wikko sas moninb (あなたが学校に行く事は良いことだ)

例 (xime) fozem xiwom (雨が降っている)

題目か主語か

例 Eras taIko (私は鰻だ)

上文は物理的に「私は鰻である」としか意味しない

連体修飾構造

- ・特に属格の格助詞「の」に応るノファ語 ni の用法はかなり近い。

「ここ」の捉え方

- ・日本語と同じ

例 koixa sas qenxa ke? (ここはどこですか?)

主客合体性

- ・英語と同じで主客合体制は無い。

モダリティ表現

・アルカの様に、それぞれの法副詞に多義性が無く、数が多い。ノファ語の助動詞（法と態を表すものが混在）は30個有る。

与格か間接目的語か/間接受身

・英語と同じ。

例 xime fozete ne Er xiwom

という文を書けないことは無いが、利害の意味は存在しない

中間構文

・アルカと同じで、そもそも自動詞が無いため、中間構文は存在しない。

動詞 v s 衛星枠付け

・日本語と同じ動詞枠付け言語

例 sas Enarete（入る） sas Utemete（出る）

主観述語

・客観的把握をする

例 kawas mnawinb（彼は嬉しい）

上の文は変ではなく、一般的に用いる表現である。

擬声語・擬態語

・学術・宗教用の人工言語であるため、公式には一切存在しない。

過去時物語中の現在時制

・英語と同じく、現在から客観視するため、過去形を用いる

直接話法か間接話法か

・ほぼ完璧に直接話法のみ持ちいる。

結論

ノファ語 (𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆) の親言語たる古イラレニク語 (𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆𐌆) は日本語をベースとして作られた言語であり、認知言語学にも日本語とほぼ等しい言語だった。その古イラレニク語を基に、アルヘニク語の構造（作者の第二言語たる英語を多いに参考）を用いて新たな言語を作成した結果、「主観的把握7，主観>客観1，特殊1，客観>主観1，客観的把握15」となり、主観優位なものが8項、客観優位の項が倍の16項と、客観的把握に偏りつつも、主観的把握の割合が決して低く無い言語となった。

